

275.6

10

275.6-60



1200501358807

培  
教育資料第四

文部省編

戰時體制と勞働力涵養



始





275  
60

暉 峻 義 等

戰時體制と労働力涵養

労働者教育資料第四輯

文 部 省





勞務者教育資料第四輯

戰時體制と勞働力涵養

發行所寄贈本

文  
部  
省





275  
60 6

本書は昭和十二年十月福岡市に於て開催せる  
本省主催勞務者教育講演協議會に於ける日本  
勞働科學研究所長醫學博士暉峻義等氏の「戰時  
體制と勞働力涵養」と題する講演の速記を同氏  
の訂正補筆を経て上梓したるものなり。

昭和十三年三月

文  
部  
省





## 戦時體制と勞働力涵養

暉 峻 義 等

三十日は東京を發ち、名古屋、大阪、神戸、四國を経て、各地の工場經營の主腦者と懇談を交へつゝ、今日この福岡にいたのであります。研究室の中で考へて居ります事と工業の現場で現在進行して居ります事態との間に喰ひ違つた點もあります。又丁度考へて居ります事が現場で行はれてゐるのを見ることも稀ではなかつたのであります。私共が考へて居ります事は、この非常時局に際しましても、平常とは變つて居らない、平常の儘を——平常考へ平常自分の信じて居ります道をこの非常時局にまづ直ぐに進んで居る、平常の覺悟は非常時局の覺悟である。只平時に比しまして、その道を進んで行きますためには色々な困難が増加して周圍の事情が平常進みたいと思つた道を遮つて居る。そこに困難を克服して行かねばならない、難關を突破して行かねばならない事由がある。これが非常時局を乗り切つて行くと思ふことであると思ふのであります。非常時局が私共に教へて居ります事は、益々平常の道が大切であると云ふ事でありまして、時局が變化致しますために別の道を發見して通るのでは



ないと云ふのが私の感想であります。

御承知の通り現下の産業社會に於きましては勞働力の不足が慇へられて居る、特に軍需工業方面に於ては、目下必要とします處の軍需品の必要の増大につれまして、段々勞働者の數の増加の必要が起つて參つた事は、既に諸君の御承知の通りであります。又金屬工業、或は機械工業、或は化學工業の勃興につれまして、こゝにも、たとへ軍需工業でなくとも、時局の影響の下に人的資源の不足が起つてゐる。この北九州に於ては炭山で働きます従業員が、この二、三ヶ月の間に非常に世間の耳目を惹いて居るのであります。併しよく考へて見ると、勞働力の不足は事變のみによつて來たのではない、既に五、六年前から實は目に立たない間に、勞働力の不足が起つて來てゐるのであります。と申しますのは、御承知の通りこの最近の十年に於ては、日本の産業構築と申しますか、日本の工業構築が漸次變化を來して參つたのであります。

曾て我が工業の基礎をなして居りました處の纖維工業に代つて、金屬工業と、機械工業と、化學工業とが漸次頭を擡げて參りまして、最近五ヶ年の間に非常な勢を以て、前時代の産業構築を壓倒して新しい日本の産業構築の状態が我々の目の前に展開して參つたのである。この新たに勃興しました處の産業構築は、勿論その資源に於て、その技術に於ても曾ての纖維工業時代のそれとは全然異つたも

のであると云ふ事も諸君の御承知の事であります。技術が變り、生産材料の變化すると云ふ事を只單に物の變化、或は産業に於ける技術の變化としてのみ我々は考へる事が出來ないのであります。技術の變化します處、そこに技術の要求します處の人間の質の變化がなくてはならないのであります。生産的技術が變化すると云ふことは、國民に對して全然異つた作業能力の質の變化を齎らさずには居らないのである。産業構築の變化は、その窮極に於ては國民の能力を使ふ部面に、變化の要求を齎らして來ると云ふ事を見逃がしてはならないのであります。産業だけが變つて、技術だけが變つて、生産材料が變つて、その人間の質に對する要求が、前と同じであると云ふ様な事は考へられないのであります。既に産業構築の主體の變化を起した所以を探つて見ますと、そこに作業力、或は國民能力の全面的な變化を我々は見なければならぬのであります。この變化の上に實は日本の産業が現在の状態まで進んで來たと考へなければ、この時局に於ける我々の心構へが出來ないのであります。

今日現はれて居ります處の勞働者の不足、機械工業にしろ、金屬工業にしろ、或は炭山に於ける従業員の不足にしろ、それは現在では只單なる數の問題として取扱はれて居るのである。頭の數だけを揃へねば、生産力が足らない、經驗者が居ないと云ふ事が現在の作業能力の最も特殊な缺陷であるからして、之を數を以て補はなければこの時局を押し切つて行けないと云ふ聲が、方々に起つて居るの



であります。御承知の通り軍需工業の部面に於ては、現在そこに新たに従業員が採用が行はれて居るのである。又炭山、鑛山に於てもそう云ふ現象が行はれて居る。而もその上に軍事應召に依る處の青壯年の戦地への發足は、益々勞働力の不足を我々の前に數の問題として考へられる様な状態を起して居るのであります。併し乍ら之は數の問題ではないのである。戦時日本の産業が、その構築を變化して宛も現在の日本の産業の要求します處が、勞働者の數であるが如く、或は多少經驗を有つて居る處の従業員は、産業技術の進歩と國民能力の活用方法の變化を物語つて居るのであると云はねばならないのであります。而し戦地に送る處の澤山な青壯年階級が必要であると云ふ事實は、益々國內の勞働力を少くする、少くするからして段々産業に従事する處の、國家に於ける生産に干與する、最も強力な勞働力の保持者が少くなる。従つてより少い勞働力を以てより良質の生産力を維持して行かねばならんと云ふ必要が、現在差迫つて我々の前に起つて居るのであります。少い生産人口を以て、出来るだけ良質の、出来るだけ高い生産力を擧げねばならないと云ふ状態は、數の問題ではなくして今や日本の産業が質の問題に轉換したものであります。數より質への轉換——之が纖維工業から金屬、機械、化學工業への日本の産業構築の變化の、最も重要な變化の中心であらうと考へるのであります。文化の進んだ

處に於ては、之等の今申します様な高度な工業に發展する處の餘地が非常にある。文化の進まない地方に於ては、斯る金屬、或は機械、或は化學工業に依つて以つて起される處の人物缺陷があると云はねばならないと思ふのであります。之は又産業の發達史を見れば解る事であり、又産業の種別の分布を見る場合に、明かに認識する事が出来るのであります。又今日の世界の各文明國の各々の比較に於きまして、我々はその國民の持つて居る文化階梯と、その文化階梯の中に含まれて居る處の生産階梯の相違を見る事に依つて、今申します様な相違を我々はつきり見る事が出来るのであります。唯に工業のみならず、文化と、技術文化と、産業との間にそう云ふ様な相違が見られるばかりではなくして、更に農業に於てもこの相違を我々は見る事が出来るのであります。日本でも東北地方に於ては、氣候の關係もあつて事情は著しく異つてゐるが、段々南に下つて來るに従つて東京近郊、大阪の近郊、或は中國の内海沿岸の様に高度に農業の發達した地方に於ては、二毛作、三毛作の處が段々實現して居るのであります。即ち漸次に土地が高度に利用せられて來るのであります。このことは勿論氣候の關係もありますけれども、その氣候の中に、その自然と文化の中に生活して居ります人間の能力如何が、農業生産力を支配する有力な要素であることを示すものと云つて良いのであります。

現在東北では、人口は一平方軒の土地の中に九拾七人である。朝鮮の人口も大體之と同じ様に九拾



六人である。之は朝鮮と東北とが若し氣候の多少の相異を見逃がせば、そこに住んでゐる住民の文化、或は農業生産力と云ふ側から見ますと、大體その能力に於て相似て居ると云ふ事を示したものと考へて良いのであります。我が國の平均人口は、土地一平方杆に對して百三十六人で、東北や朝鮮は平均よりも餘程少い人口でありまして、近畿地方とか、東京の近郊は非常に高い人口を有つて居るのであります。この人口包容力は、その土地に住んで居ります住民の作業能力の如何に依るのであると思ふのであります。茲に農業に於ては既にずつと以前から、實は土地の廣さであるとか、その土地を耕す所の人間の數とかの外に、その住民の能力如何と云ふ問題が、實は非常に大切な問題として農業生産力の上に考へられて居るのであります。處がまだ現在の様な高度の工業化が参りませんでした今から十五年ばかり前の人々は、非常に心配しました。日本では土地の耕地の増大よりも、人口の殖える速度の方が大きいから、その内に日本人は食糧難に迫られるであらうと。この日本内地に出来る食糧で養ひ切れない人口は、之を植民に移すか、或は産兒制限に依つて人口増加を制限するか、どちらか選ばねばならない。この二つが不可能であるならば、商業或は工業を振興する事に依つて、日本の人口の維持力を高めて行くより外はないと考へられたのであります。大正の末期に於きまして、産兒制限論が相當流布されました事は、諸君の記憶に残つて居る事と思ふのであります。その當時の人口問

題は、やはり人口の數が、之を捌いて行きます食糧の生産の増加よりも大きく増大する、之を如何に取扱つて行くかと云ふ事が今から十五、六年前に學界、政治、經濟の廣い方面に亘つて日本人を支配した處の、思想の流れの一つであつたと考へられるのであります。その數の問題が農業を中心として發展して參つたのであります。而も當時、日本の商工業が今日の様に發達して居らない時代にては、農村の人口問題と云ふものは日本の人口問題であつたのであります。

その解決には數を何うするか、殖えて行く數を何うすべきかと云ふ事に、人々が頭を悩ましたのであります。食糧も無ければ不可ない、又經濟上から考へまして、富以上の——自分の収入以上で以て扶養しきれない家族が澤山居ります事は、成程現實の問題としては苦痛であつたに違ひないのであります。併し之は皮相の見であつたと考へるのであります。何故ならば、富或は經濟は人間の能力に依つて作られる處の生産物にすぎないのであります。富も或は經濟現象も擧げて、之れ人間の能力の顯現であるとする處に問題の重要さがあるのであります。その働さが經濟的部面に表はれた時に、物は價值を生じ、そのねうちを増大するのであります。富の經濟現象は凡て人間の能力によるのであると云ふ事を考へます時に、實は人間の數よりも人間の質が、より大なる問題であると思ふのであります。富は人間がその能力によつて知識を開發し、技術を創造する處に生ずる。即ち生産技術の變革が起



り、その變革を齎らす事に依りまして大きな生産上の革新がなしとげられ、之に依つて富が増大して行くと云ふのが我々の歴史であります。凡て我々の住んで居ります處の環境の改變も、その環境の改變に依り生活を高めて行く事も、擧げて人間の能力の働きにかかつて居ると考へられるのであります。即ち生活上のことはあげて人間の能力にかゝつてゐる。これが實は質の問題であらうと思ふのであります。

現在の時局に於ける従業員の不足の問題を、今申します様に、農業に於ける、或は工業に於けるそれ／＼の發達の基をなす人間の能力と云ふ點から考へると、益々數の問題ではなくして質の問題であることがわかる。質の問題としてこの現象を擱んで行かねばならんと云ふ事が解るのであります。即ち質の問題として現在の勞働者の不足を取扱ひます事こそ、この非常時局を乗り切つて行きます一つの大事な觀點であらうと思ふのであります。

處が今日職業紹介所に於ても、或は人を求める側に於ても、仕事の現場に於ても、擧げて現在の勞働力の不足の問題が只單なる頭數を揃へ、人數を整へると云ふに止まつて居るのではないかと云ふ様な感を私は有つて居るのであります。この點は相互に非常に警戒しなければならん問題であらうと思ふのであります。時局の進展如何に依りまして、この時局が長引けば長引く程、數の問題よりも質の

問題となつて來る。立派な能力を有つた者を出来るだけ國民の中から多數發見して、之を各生産部面の中で如何に活用するかと云ふ心構へで、我々はこの時局に對してゆくことが大切である。それだけではない、既に産業従業員の一般的な質の低下があり、而も人間が不足して居る今日の現状に於ては、質の悪い者でも、之を現場で作業させる事に依つて、良質のものに變化すると云ふ努力を欠かしては、時局を克服する事は不可能である。

併し先日來私の見て參りました處の各工場に於ては、比較的劣質の國民は、從來通りに見むきもされず、路傍に捨てられて居つた様な状態ではないでせうか。皆が一致して、弱い者も、強い者も、一致して國家の生産力を支へて行かねばならない。一寸の虫にも五分の魂と云ふことがあるが、たとへ弱い者でも、その質をよく鍛へ、それを活用することに依つてこれを良くする途がある。それによつて彼等は、己が生活を支へ、國家の生産力に干與しうる能力の保有者となる。そこに時局克服の立派な手段があるのであります。若し現在あるが如きこの時局に於て、出来るだけ規格に合ふ者だけを探つて、それに依つて辻褄を合せると云ふならば、苦心はないのであります。そうではなくして積極的に悪いものをよくし、質の劣つたものゝ能力を高め、その力を活用し、國家の生産能力を昂めて行くと思ふ事にならねばならない。もつと大きな活眼を開いて、國民全體を考へて行かねばならんと思ふ



のであります。そこに時局認識の大切な點があるのだと思ひます。この間中方々を見て廻つて熟々感じた事であつたのであります。

時局は既に先月の臨時議會に於て、政府の聲明のありました通りに、或は持久的な戦を覺悟しなければならぬと云ふ事を、國家は既に十分決意して居るのであります。この決意の下に、我々は各生産部面に於て、己が擔當致します處の現場に於て、勿論持久對策に邁進しなければならぬと思ふのであります。

この時局對策の中で生産能力、或は作業能力に關する限りに於ては、能力の活用と云ふ事に苦心を致します事が、先づ第一の主眼であると思ふのであります。能力の活用とは何うしたら良いのであるか。

我々は既に過去十年の間色々同僚と共に「作業能力とは何であるか」と云ふ事を研究致して參つたのであります。作業能力は勿論遺傳的な要素を有つて居るのであります。親譲りの素質である、之は今日迄の生物學の研究の結果が示して居るのでありますけれども、この遺傳的財産は陶冶訓練に依りまして、作業現場に於て日々發達變化を遂げて行くのであります。變化をしない作業能力はないのであります。一旦採用された従業員は、その第一日から既にその身體と精神とは刻々作業に適する人間

となるために、殆んど全身の細胞がその與へられたる環境に對して順應すべく、動員されて居ると言つても良いのであります。そこに現場に於ける心身構築の改造が起る、而もそれは作業の種類如何に依つて、それ／＼それに適當するやうに改變が加へられて行くと云ふ事實を、我々は色々な身體の測定から或は體力の検査から之を立證する事が出來て居るのであります。作業場は作業能力の涵養場で、作業場は作業能力の發育場である。作業場は作業能力の訓練所である。ここに採用される處の能力はこの非常時局の裡に於ては、日々作業に適當するやうに仕上げられるやう、工夫と努力とがいたされること云ふ事が最も重要であると思ふのであります。この意味に於きまして、この作業能力の訓練と育成と活用とを、現下の時局の下に、而も勞働力が不足して居る現下の状態の下に十分考へて參ります事が、非常に大事な事であらうことと思ふのであります。

熟練労働者で、既に五年も十年も或る作業に働いて居る労働者約百名と、それから日々仕事を變へて行きます不定労働者、不熟練工の約百七十名を取りまして、その早朝空腹時の尿を取つて尿の中に含まつて居るカルシウムを計つて見ると、前者ではカルシウムの排泄が多く、亦排泄する人員數も著しく多いのに、後者ではカルシウム排泄量も少く、且排泄せぬ人員の數も著しく多いのであります。次に我々も研究室の中で頭を使つて居りますものの、早朝空腹時の小便を取つてカルシウム



を計つて見ましたが、我々同僚の約三十人の中で、カルシウムを排泄する者は二人しか居らなかつたのであります。仕事の變化する不熟練工では、百人の中二十六人あつた。處が五年或は十年に亘つて、日々同じ仕事場で筋肉労働に従事して居ります熟練工を取つて見ますと、百人の中九十九人迄カルシウムを排泄して居るのであります。この事は非常に大きな問題を我々に與へて居るのであります。斯くも日常生活が尿中に排泄する處のカルシウムの量を變化すると云ふ事は、職業そのものが一つの國民の素質、或は性格の築造には極めて大切であると申して良いのであります。即ち仕事は國民の體質改善の手段であり、素質變化の手段であると考へねばならん事になつたのであります。又一方から考へますと、労働に従事する事に依つて、我々は素質を變化させる、カルシウムの出ない素質からカルシウムを排泄する處の素質へ變化する。つまりは一つの體質から他の全く異つた體質への改善は、作業を通じて可能であると云ふ事の確證を我々は得たと考へて居るのであります。この點から言ひますと、弱體を相當の用意と、周到なる注意の下に作業に就かせると云ふ事に依りまして、我々は比較的弱い素質を強い素質に變化する事が可能である。茲に非常時局に於て良質の労働者の少い時代に、國民能力の改造と、その強化とを作業現場に於て遂行することが、長期對策の最善の方途であると思ふのであります。

又最近では、從來一交代制であつた處が二交代制になりつゝある。晝間のみで作業を致しました處が、夜間作業をしなければならぬ状態になつたのであります。非常時局なるが故に、新に晝夜作業を開始された處では、その労働力の活用は極めて慎重でなければならぬと思ふのであります。現在の色々な研究の結果から考へますと云ふと、残業の生産能力にしる、或は二交代制のそれにしたところで、一交代制の時よりも、以上の作業能力を示したと云ふ事を私は聞いて居らないのであります。残業や二交代制は能力の活用に就ては疑ひもなく、非効率な作業制であると言はねばならないのであります。併し時局は二交代制の實施を餘儀なからしめると致しますれば、之に對しては出来るだけ少い犠牲に依つて二交代制を實行する事が、作業能力活用上頗る必要であるのであります。より多い努力によつて、より悪い生産能力しか示し得ないと云ふ二交代制度は、出来るならばさけないのではありますが、止むを得ない。

或る眞面目な企業家によると、二交代制は高々晝業に比して七割の能率しか出来ない。種々の條件が悪ければ或は六割になるかもしれない、夜業には労働者の監督指導が十分に行かない、また夜業を始めたからと云つて、直ちに多數の技術家を増加することは困難である。また立派な労働者を一度に二倍にすることも不可能である。立派な労働者の居ない處に立派な作業能力の發展はない。而もこれ



を承知の上でやつて行かねばならぬ。一旦二交代制になるとやがて平和になつた場合、又一交代制に還へる場合、相當の無理をしなければならぬと云ふ事は解つてゐるが、まあどうにかなるだらうと目を閉ぢてやるのだと云ふ事を告白して居つたのであります。が、それは眞實の言葉であると思ふのであります。

國民能力の活用こそ、現下の非常時局を乗り切るための最も大切な主眼點であると云ふ考へからは、労働時間の問題は、既に諸君が二ヶ月も前から色々問題としてお持ちになつて居る事と思ふのであります。現在の状態では労働時間は一般に随分伸びて居ります。或る方面では十八時間もの労働時間を、三ヶ月も続けさせて下さいと云ふ願ひが縣廳に出て居る位でありますから、十四時間と云ふ作業時間は、この頃決してめづらしくはないのであります。最も適當なる労働時間の長さと云ふ問題は、今日では最早問題になつてはゐない。労働者が常に激濁として常に最高の生産力を示す様な労働時間の維持と云ふ事は、今日の企業家の頭から既に去つて了つて居るのであります。それが果して非常時克服の最良の手段であるか何うかと云ふ事を、お考へ願ひたいと思ふのであります。

労働者が激濁として、常に日々立派な仕事、最高の仕事をしてくれると云ふ事は、生産能力の維持の上に、平時に於ては勿論、非常時局に於ては益々大切な事と思ふのであります。處がその大切な原

理は非常時局の名の下に全部拭ひ去つてしまつて、註文品が出来ないから、納入の期日の間に合はないからと云ふ所謂非常時の理由の下に、長い労働時間が流行してゐる。生産能力の最大限の維持と云ふ事ほど、國家産業にとつて大切なことはないと思ふのであります。即ち最高の作業能力の長期に及ぶ維持こそ、時局の最も圓滿なる推移を可能ならしめる所以ではないでせうか。長過ぎる労働時間を本来の短い労働時間に還すと云ふ事が、國民協力の最も大事な點ではないでせうかと思ふのであります。激濁たる労働意欲をよく維持し、例へ戦争が一年二年……假令五年續いても、來る日も／＼衰へると云ふ事なくして激濁として作業して行く。かゝる状態が全軍需工場のみならず、一國の産業を支配する事こそ、非常時に處する我々の心構へではないかと思ふのであります。この考へに立てば、十時間の労働時間の上に、四時間も五時間もの残業を課することの不可ないと云ふ事は、理窟を言はんでも解る事であらうと思ふのであります。

この間東京の或る工場で、極く少数でありますけれども、労働時間研究を遂げたのであります。十時間の正規労働時間の外に、二時間の残業があるのであります。三人の研究者が一人の労働者を圍んで、作業の移り變りを朝から晩迄觀察したのであります。正規の労働時間では勿論大した變化はない。その労働者は日給であるために、來る日も／＼測定の間同じ生産高を示したのであります。



處が二時間の残業では、四十分間は働いたけれども一時間二十分は全部損失時間であつたのであります。労働者に一時間二十分を無用にすごさせて、企業者はそう云ふ事があるのを知り乍らも、この低率なる作業力に對して賃銀を拂つてゐる。双方とも誠意がない。かくの如くで何處に一體協力の表はれがあるのであるか、資本家はたゞ労働者の作業能力を役務すること、労働者はたゞ賃銀のために働き、それに依つて自己の生活の安全を圖ると云ふことより外に、非常時局の認識、従つては非常時に於ける國民の行動がないのではないか。たゞそれだけのことであるならば、この時局に於ける國民の生産力に甚だ遺憾なことであると思ふのである。之はある某大工場だけの事ではないのであります。少くとも常備賃銀を支拂ふ全部の工場では、労働者は或は八分だけの力しか出して居ないのであるか、十の力を以つて居ながらそれを十分にこの時局に於て活用せずにある。それを工場當局も従業員もあたり前のことだと考へてゐるのでは、正しく非常時局の認識に立つ行動ではないのであります。又、出來高拂ひ制度下の労働者はその出來高拂ひの制度のために、己が健康と労働力を自ら酷使し、生産力のより良き將來の伸張を犠牲にして省みない現状を、従業員自らも企業家も、双方ともに當然なりとして之を許し、それに何らの訓練或は警告を與へないで放置して居ると云ふ事は、果してこの時局に於ける労働力の最善の維持方策であるか何うかと云ふ事を考へて戴きたいのであります。労働

時間の問題では、最も有効適切なる労働時間の長さ如何と云ふ事を決定する前に、先づ國民能力の浪費を敢へてせしめる様な現在の状態に斧鉞を加へて戴きたいのであります。之をどうにかしなければ最善の最も有効な労働時間の決定は不可能である。現在の慣習をその儘にして、誤つた認識と行動とを根本的に改變せずして、科學的な力で労働時間の問題を解決すると云ふ事は無理な注文であるのであります。

労働時間の長さは、各作業場に於て、各種の異つた作業に従事する労働者が、そのもつてゐる能力を最も善用し得、最もよくこれを活用なし得ると云ふ時間の範圍に限局されなければならないのであります。これは労働時間の長さの一般的原则であると思ひます。

一體、作業能力の最善の發揮とはいかなることを意味するのであるか、その條件を明かにつかむことは、相當困難な問題であります。或は作業に用ひられたエネルギーの問題の究明から、或は身體全體或は作業する身體部位の態度の上から、或は臓器の機能の上に表はれる處の種々な變化の側から、或は身體だけではない精神現象の表はれを科學的な方法により掴み、これらの事實の上に最善にして最も有効なる作業とは何かと云ふことを考察し、之を目標にして労働時間を決定しようとする研究して居るのであります。併し乍ら之には相當の時間を必要とするのでありますし、一人や二人の現場の労働



者についてこれを研究しても、全體に通ずるものではない。少く共一つの鑛山や或は大きな工場を全體として研究の對照にして、凡ゆる方面から之を検討して初めて決定される處の問題であると思ふのであります。

勞働時間の長さは、必ず作業によつて起る疲勞の恢復のための適當なる休養の時間、或は休日を考慮することによつて始めて用意周到であります。勞働時間だけ考へたのでは、十分でないのであります。現在の様に勞働時間が長くなつて居る時期に於ては、休息時間や休日を廢する事が寧ろ當然のやうに考へられて居るけれども、之は正に無思慮と云ふべきでせう。勞働が強化されるればされる程、勞働時間が長くなれば長くなるほど、休憩時間は之を短縮や廢止をなさず、むしろこれを適當に配置して、或は場合によつてはこれを延長しなければならぬ場合すらあると思ふのであります。非常時局であると云ふ名の下に休養時間を少くすると云ふ事は、時局の圓滿なる進行を期し、且つ時局の要求する生産能力を維持する上には極めて望ましからざる事柄であります。事實勞働者を現場でよく觀察しますと、例へば就業時間が四時間續いて、休養時間を一分も與へてゐない場合にも、勞働者は適宜に自ら休養方法を工夫して休んで居るのであります。休養時間を與へないと休んでゐないと云ふのは認識不足であります。勞働者は皆各々自らその勞働と勞働時間に適應するために 適宜に休んで居るの

であります。併し休養時間を與へても、我儘勝手な方法で休養し、十分にそれを善用しない場合には、その効果は亦疑はしいのであります。

例へば郵便局の作業の様な軽い作業で、従業員の一週間の作業時間記録を取つて見ますと、三十分と云ふ比較的短かい時間内で少しも手を休めずに、持續的に作業して居る者は極めて少ないのであります。その間に三分、五分と云ふ短い休息の時間、作業をしない時間が相當に澤山あるのであります。又工場の作業について仔細に作業の進行状態を觀察しますと、勞働者が勞働時間中、自己の自由意志に基き、又はある場合には止むを得ず、又時としては作業過程の進行上の必要から、その作業を休止して居る時間があると云ふ事、澤山に吾々は有つて居るのであります。だから三十分の休みを十五分に短縮しても、十五分に相當する時間を短縮した事にならない場合が多いのであります。休憩時間の効果は作業の合理的組織が出來上り、作業過程がよく整つてゐる工場ほど有効であると云ふのは、この事實に基くものであります。それ故に先づ作業そのもの、合理化、作業過程そのもの、整備が先決條件であります。その上に休息時間を出來るだけよく配置するのであります。勿論ベルトコンベアによる作業には、そう云ふ休憩時間はないでせう。後から後から、品物が勞働者の前を通過する。従つて休息時間は極めて少ないが、併しそれでも多少ともに休憩時間はある、如何なる作業も休



憩時間なしに行はれて居るものは、ないと云つても差支へないのであります。必要な作業休止時間と不必要な休止時間がある。この不必要な休止時間はこれを出來るだけ除去し、作業過程を整理する。かくして後労働時間が長ければ長い程、それに對應して適當な休憩時間を配置し、之を嚴格に實行すると云ふ事が、生産力擴充の上には極めて大切な問題であると思ふのであります。而も今日以後、或は來る事あるべき長期戦争の場合に、國家的要請のもとに強制的な労働が必要となれば、女も、子供も、國家生産を維持するために、全部が軍需工業品を作らねばならないと云ふ事態が起るかもしれない。それは國家が命ずる處の國民の義務として行はれる處の労働に變つて來ると思ふのであります。丁度男子が防衛の義務を有つて居ると同じ様に、時局の赴くところ、或は生産的活動の義務的な遂行が國民に要求される時代が來ないとも限らないのであります。かゝる時期が來ます場合に、我々は出來るだけ國民能力を有効に、今よりもつと能率よく、又よく國民の能力を結合して生産をあげて行かねばならない時代が來るのであります。そう云ふ事態が來ると、労働すること、勤勞することだけが國家的任務を遂行する所以ではないのであります。かゝる義務的労働に對しては、必ず義務的休養の制度を以て對處しなければならぬのであります。現下の軍需工業の労働部署に於ては、労働は既に一種の國家に對する義務的労働の色彩を有つてゐるが故に、又企業家もその義務として生産を擧げ

て居ると認められるからして、かゝる義務的労働の行はれる處、必ず義務的な休養の必要があるのであります。労働後に休養の必要なること、一定の強制的労働の後にはこれに續く時間に自由を與へて労働意志を振作し、兼ねて労働の疲勞を除去し、次の労働に備へるためのエネルギー源を蓄積するため休養を與へることの必要は、人間の生命活動の持久的保持に對しては極めて必要なることなのであります。

我々の研究によると、紡績工場で行はれる軽い作業では、晝業十時間に對して夜業十時間は約二割の能率の減退がある。軍需工業に於けるやうな機械的な仕事、即ち機械を人間が使ふて作業する場合の多い、より精密な技術を要する軍需工業では、夜業と晝業との能率の差はもつと大きなものであらうと考へられます。また就業六日間に涉る場合と、七日或は九日、或はもつと長く十二、三、四日間の連續作業の場合とを比較すると、就業日數六日間の場合が紡績作業に於ては最も能率的であつたのであります。七日、九日、十四日と就業日數が長くなるほど能率は低下する。機械的な精密作業では、長い就業日數の連續による能率の低下は、もつと著しいに相違ないのであります。機械的作業には週休が必要であると云ふ事を我々は感じて居るのであります。今日の機械工業には場合によつては精密で、而もエネルギーを必要とする作業部署が多くあるのであります。これらに於て長い労働時



間を有つ而も一就業期間に含まれる就業日数の多い場合は、能率上極めて警戒を必要とすると思ふのであります。先づ週休がよい。労働が強化された場合や長労働時間の場合、五日、六日に一就業期間を制限する必要がある。これは研究上の数字からではないが、確かなる推定であります。即ち作業能力の維持の上から、また来る日も来る日もその労働力と労働意志とが常に潑刺として居り、最も高い生産力を表はす上から、そうすることが必要であります。作業が忙がしければ忙しい程、これに對して給與される休日の効果は大きいのであります。併しその休日を何等の指導なく、放つて置いて遊ばして置くと云ふのではなく、その休養の効果を十分に收めるためには平常から従業員の指導と訓練とが必要であることは勿論のことであります。

現在日本の小學校では、七歳から十二歳の少年者が學習のために修業して居ります。それで週休である。六日學習の後に一日休む。その上に尙一年に約五、六十日の別の休暇がある。中學校は十二歳から十七歳で、之は工場で言へば保護職工と同業者であります。中學生には之はやはり一日に六時間の學修時間が定められ、週休制である。年に六十日の休暇を有つて居る、それ以上の高等學校では休暇の時間もつと多い。多分國家は之等の青年以下の國民に對して、その體力の状態や學習能力から考へまして、その學習と體力とを最も充實させるためには一日五、六時の學習能力と、一週間に一

日の休養と、一年に五、六十日の休暇とを是非ともに必要とすると思ふ立前から、この制度を確立してゐるのであります。或は之には理由はないかも知れませんが、併し既に三、四十年來の慣行である。この慣行が日本人の學習能力に悪い影響を與へると云ふ事であれば、もう既に疾くから之は短縮され、或は時間が延ばされて居るだらうと思ひます。處がその事が無しに今日迄來て居る。處が労働者の方ではそれ所ではない、紡績では十二、三、四歳の少女が一日八時間、或は八時間半の就業時間を働き通してゐる。そして一ヶ月に僅かに二日の休日である。それで誰もあやしまない。而も休暇はない、あつても、盆だの正月だのに二三日である。通算して一年に十日に足らないのであります。それは自由休暇であつて、作業能力を高める意味は有つてゐない。その他の多くの労働者は一日に十時間、軍需工業では一日十二—十四時間である。週休の處は非常に少い。殆んど大部分が月に二日の休日、別に休暇と云ふものはない状態であります。これで果して體力の維持と労働力の健全性は十分に保たれるのであるか。勿論不十分である。仕事をさせて、只それに賃銀を與へればよいと云ふのでは、國家が國民の生活を保證してゐるのではない。それは國民力を使つてゐるだけで、涵養してゐるのではない。それでは労働力は伸びない。國家生産力は充實しない。單に生産と云ふ方面からのみ考へても、長過ぎる労働時間よりも、より短かい労働時間の長さの方が能率的であり、作業能力の向上には一層



必要である。

そう致しますとこの労働時間は、寧ろどちらから考へましても、永くするよりも短かくする事に努力して行かねばならぬのであります。この認識の上に新しい労働能力を創造する事が我々の任務である、而も今日の産業界の情勢は長い労働時間が、宛も現在の生産上の難局を打開する唯一の手段として考へられて居ると云ふ事は、吾々の體驗や科學的認識に反してゐるのであります。靜かに現在の労働状態を考へ、過去を振り返り、將來に思ひを致すと云ふ反省の必要があるのであります。只だ目先のことにとらわれて居ると取返しがつかないことになる。それは國家の生産能力を持久する所以ではないと思ひます。殊に科學的文明は今やわが國民生活の全體を支配して居る。この科學的文明と機械的作業組織の進轉する限り、何れの労働時間も長いよりも短かくする事に意義がある。出来るだけ短かい時間の中で、國民の有つて居る力を十分に活用して、我々の必要とする處の生産を維持して行くこと云ふ事を、現在の我々の有つて居る文化及び我々が將來建設しようとする文化の目標にしなければならぬと思ふのであります。

この考へ方に對して、「今は非常時局である、そう云ふ事は理想論であつて、實行不可能である」と云ふものがある。併しそれこそ認識不足な考へであると思ふ。何故ならばこの時局は去る臨時議會に際

して畏くも下し賜はりました御詔勅に宣べさせられてゐるやうに、「東亞ノ平和確立」と云ふ大目的がある。この目的に向つて國民は邁進すべき秋であると思ひます。この時局こそは、日本の生産力を以て世界の平和に貢献しなくてはならぬのである。東洋平和の推進力は、わが生産事業と國民の生産力とである。これによつて、東亞の平和を確立するのが現下緊要の目的である。東亞の平和を確立する事が目的ならば、文化の發展に逆行する様な方途は極力さけらるべきである。その覺悟と認識とは労働力の問題は勿論、労働時間を處理する上には極めて大切な我々の心構へでなければならぬと思ふのであります。

我々のもつてゐる文化は、今迄よりも短かい労働時間の中で、我が國民及び國家の必要とする處の生産力を十分に示すことが可能であると云ふ點にまで進んでゐるのである。この自信の上に、努力を以て労働時間を處理し、考へねばならぬ。またこの理想と目標との下に、労働者の教化を考へ、この考への下に工場内に於ても従業員の健康状態を管理し、生産技術の進歩に努力しなくてはならぬ。これが現在の我々の任務であるのであります。この任務以外に我々の非常時に處する任務はないのであります。でありますけれども、我々が東京、名古屋、大阪方面の工場を澤山見て來た認識は、それと逆行して居ると云ふ事を非常に遺憾に思ふのであります。



御承知であらうと思ふのですが、本年五月ワシントンで労働會議があつたのであります。紡織工場の労働時間問題が主要な議題であつた、之には資本家の代表と、労働者の代表と、政府代表が参加した。會議後にジュネーヴから故國に向つて放送があつた。「資本家代表と労働者代表とは仲良くジュネーヴで喧嘩をして居ります……」と云ふ、朗らかな放送ではあり得たであらうが、眞劍ではない。國民の體力が弱くなつた、この體力を増進するために國民は擧げて、新しい政治を待望してゐる時である。體力を弱くしては我々の民族の前途は實に暗澹たるものがあるから、之を強くしなければならぬと云つて、厚生省と云ふ様な役所まで作つて、大いに革新政治に乗り出そうとしてゐる。その時に「資本家代表と労働者代表は仲良くジュネーヴで喧嘩して居る」と云ふやうな呑氣なことではない。資本家も労働者も一本になつて、もつと眞面目に最も忠實にもつと着實に、國家の生産能力を充實し、これを建直すと云ふ事に勵まねばならぬのではないか。處が會議に於て議論されて居る處の問題は、日本の紡績生産品の安價なのはソシアルダンピングではない、國民の生活費が安いからである、生産機構の特色の然らしめるところである、といふやうな辯解をしたに過ぎないのであります。そうではない、我々が東亞の平和を建設し、日本の生産力が東亞平和の推進力となつてグン／＼力を伸ばして行かねば、東亞の平和の建設は出來ない。従つて世界の平和は保てないのである。それが爲

に我々は八時間の労働時間が必要なのである。國民の健康と労働力の現實から、時間の問題よりも、もつと實質的な問題がある。榮養の改善、従業員の教育施設の充實、そうした仕事着々進んでゐる。それをもつとよくすることに、資本家も、労働者も、政府も一層努力する。そして世界に冠たる紡績工場を實現する。これが吾々の理想であり、目標であると、種々の材料や資料の上に堂々と議論出来る筈ではなかつたでせうか。今日は最早貸銀勘定の時代ではない、我々は大きな理想を實現しようとするために凡ゆる者が協力一致して、この時局に當らねばならぬのであります。日本の生産力は、日本民族と日本文化發展の核心であります。この生産力を維持し、之を發展して行く事なしには、我々の文化を更に一層高めて行くこと云ふ事は不可能であります。それが爲には國民の生活と能力とを、その質に於て向上させることが大切である。質の向上は、労働時間と言ふ問題の下では、長い労働時間よりもより短い労働時間の中で、もつと良質の仕事をすると言ふことを意味するのであります。

諸君の中にも引受けた注文品の納入期限に應ずるために、労働時間を延長する事が必要であると思はれるのでありますが、それを考へ直して、出來れば時間の延長を出来るだけ短かくする様、出来るだけ労働者の能力を浪費させるやうな労働時間ではなしに、労働者として出来るだけその能力を活



用し、力を有効に用ゐしめ、より短かい労働時間で良質の作業をするやうに馴致されることをお願いいたしたのであります。私の願ひはそう無理ではない、出来るだけ短かくして行く工夫であります。之がやがて平和が齎らされる時期に於て、一層高度の、而も一層の良質の生産を、良質の人的要素に於てなし得、一層良い産業機構を建設する唯一の手段であると思ふのであります。

次に申上げたいと思ひます事は、私の最近最も重要な問題として考へて居る事であります。それは日本の工業は日本の農業を度外視して發達は不可能になつたと云ふ事であります。現在では労働力が不足して居ると云ふ聲をしきりに聞くのであります。工業の労働力の不足は、やがては農業の労働力の不足を意味して來るのであります。之を反對の側から言ひますと、工業圏内に於ける作業能力を維持しようとするれば、農村に於ける農業生産力を維持しなければならぬと言ふのであります。工業は農村を勘定に入れることに依つて、初めてその人的要素を充實する事が出来る。工業と農業とはこの數年來非常な緊密な相互關係を有つて來て居るのであります。今日の時局に於ては、殆んど不可分の關係をさへ有つて來たと思ふのであります。遍歴致しました多くの工場では、事業主は擧つて農村出身の素人が欲しいと言つて居るのであります。直接農村に手を伸ばして農家の子弟を——農村で育つた青年を、現下の工業に求めようと努めて居る。この事は農村に育つた労働力が——農村で涵養さ

れた作業力が現在の日本の工業の主體である。軍需工業に關する限りに於ては、適任であると云ふ事を證據立て、居ると思ふのであります。その事は一つ突き進んで言へば、現在の重工業の求めてゐる従業員の素質は、技術ではない人間だ。経験工よりも素人が欲しいと言ふのは都市の住民よりも田舎の——知識ではありません、技術ではありません——立派な素質を有つた人間が欲しいのですと言つてゐるのであります。求める處のものは、技術ではない、人格だと言ふのであります。人格を求めて居る、それならば企業家も考へねばならない。そう云ふ人間、一人格としての労働者が欲しいならば、工場自體が有つて居る非國家的な要素を、この際清算しなければならぬと思ふのであります。農村の青年は純である。農業労働に於ける一日の勤務は決して一日の金錢收入ではない、金錢を直接の目標としたのでは農業は出来ない。一年働いても、天災地變によつて壊されてしまふ。天地自然の間に人事を盡す。これが農村の勤務生活の本質である。この勤務によつて養はれて來た農民的資質を企業家は求めて居るのであります。それ程、日本の農業及び農家で養はれて居る處の勤務能力は現下の非常時局に於ては、作業能力の最も大きなものを有つて居る。この作業能力を極力大切に、益々之を伸張してこそ企業家の責任は果されと思ふのであります。その用意なくして、たゞ農民がいゝ、農民精神が欲しいと言つてそれを採用し、更にそれを訓練教化し、立派なものに仕上げる努力と



苦心を拂はず、たゞ使ひつばなしでも無理な作業を長時間させておくだけでは、假令高賃銀を支拂つても、賃銀を支拂ふだけでは、事業家の責任は盡し得ない。即ち健康を害ひ、労働力を萎微させる様な労働条件の下に労働させて、それで一體國民としての青年を遇する途であるといへるであらうか。

工業と農業、農業労働力と工業労働力は、現下の時局では非常に緊密な關係になつてしまつたのであります。又一般の國家情勢から考へますと、農業生産力を萎微させては工業生産力は立つて行かない、當局者が推肥を奨励すると、硫安製造家は悦ばない。そう云ふ事はまゝあるのでありますけれども、之は品物の關係、經濟關係であります。物の關係に於ては時としては對立はある。農村經濟と都市經濟との間にも往々對立はある。併し人間と人間との關係に於ては、農村は工業人口の資源であり、また工業は、農村人口の有つてゐる處の國民的資質を一層高度化する事に依つて、更に工業文化を増進し、之に依つて我が國の生産的技術の世界的地位を確保することが可能となるのであります。人間と言ふ觀點では、農村と工業と互に補佐協力する。この人的資源の聯繫こそ、國家生産力の基調であるのであります。農村に飢饉が來たり、或は不作が來ると生産力が萎微する。農民の労働意志が萎縮する、農業經營が低下する、これを回復するには非常な努力を要することは、飢饉史を繙く人の熟知する處である。農業生産力が低下し、人間の生産的活動生活の欲望が萎縮すると、やがて工業に於ける

生産能力の萎微を來すのである、工業の生産能力を活潑ならしめ、或はまた工業人に於ける労働力を充實したものにしようとするれば、農村の生産力と労働力とを涵養する事を慎重に考へて行かねばならぬのであります。健康で、純で、眞面目に地味に仕事をする農村の青年を、國家の工業的生産に役立て、行くと言ふ事は、平時でも非常時でも良いことであります。併しそれは工業に従事せしめて、更にその能力をよいものに仕上げるのでなくていけない。悪くする事があつたら、それこそ工業は國家の人的資源を害ふものであると思ふのであります。

農村の子弟を工業的勤勞に従事せしめて、工業圈内に於て、工業の技術と工業の作業場の中で、立派な國民として育て上げる事に依つて、初めて工業家の責任とその國家的任務は満足されるのであります。工業が既に欲してゐる労働力が、農村で如何にして發育し涵養されつゝあるか、この點を工業家は十分に考ふべきだと思ひます。場合によつては農村の労働力の涵養にまで工業家はその責任を分擔する。その代りに農村も亦、工業の欲する人的資源の資質について常に注意を拂ひ、その動向を見定め、それを満足するよう積極的な方法を講ずべきであると思ふのであります。

既に前にも述べましたやうに、日給の者はその能力の八分しか仕事をしない、出來高拂ひ賃銀制下の従業員は、その能力の限度を超へて健康を害しても作業をやる。十二分も十三分も仕事をしてゐる



と云ふ様な事は、資本主義機構のもたらした一つの悪風であります。農村には全體としては少ないのであります。農業労働は人事を盡して天地の運行の間に行はれる仕事であります。採算をはじくばかりが農業経営の能率ではないのであります。採算が重點では農業ほど割の悪いものはない。金儲けが目的ならば農業をやるよりも、もつと有利な職業がある。金ではない、勿論貸銀ではない、農民とも收穫の多さを望んでゐるでせうけれども、金勘定以上に、農民はもつと自然の欲望を有つてゐると思ひます。例へば工業従業員に見られるやうな、俺は一日二圓の仕事をするれば良い、一日の仕事は賃銀できめて行くと言ふやうな氣持ちは、農民には極めて少いと考へられるのであります。常に金銭賃銀を以て自己の作業量の目標とすることが永年の習慣になつて、之が現在の工業社會を支配して居る。この勤務に於ける賃銀勘定の成立、之が工業生産力勤務能力の萎微を全體的に來してゐる唯一の原因である。品物と能力が金銭を以て評價されるのが、資本主義的人生觀である。今日労働者の生活能力が一般的に萎微して居る原因は、長日月に涉つて習ひ性となつた賃銀制度の結果である。潑刺たる作業能力を振作して、この時局の持久的な生活力を益々振作する。之を出来るだけ長く維持して行きますためには、金勘定によつて支配されてゐる、この現在の作業能力の統制方法では、最早到底駄目である。それでは潑刺たる作業意志が振作されない。生き／＼とした而も最も忍耐強い良質の作業

能力は金勘定ではなく、もつと深い、もつと廣い人間性の上に初めて、發展し得るのであります。作業能力は人格の顯れである。人格こそ最も良質の作業能力である。従つて人格の陶冶こそ時局下生産能力の發揮と活用との最も大切な方途であると存じます。

現在の賃銀制度の根底には「労働は商品なり」と言ふ意味を多分に含んでゐる。即ち相不變多くの工業には残業賃銀がある。残業一時間に對して何十錢、二時間に對しては幾程と云ふやうに、勤務は時間によつて切り賣りされてゐる。それが作業能力の萎微と沈滞との原因である。作業意識の振作、作業意識の持久的な發揮は、かくの如き資本主義的な考へではだめである。それはもう行き詰つてゐる賃銀制度である。労働者が自己の有つて居る能力を、いかに最も有効に且つ適切に、國家産業に活用してゐるかと言ふ、その労働者の精神状態や心構へ、或は作業に於る人格的な方面は、現在の産業界に於ける賃銀制度の下では、蹂躪されて了つて居ると思ふのであります。この現状を打破することこれが勞務管理の時局下の重大な問題であると思ふのであります。労働者の生産能力を如何に潑刺たらしめるか、いかに健全ならしめるかに就ては、過去の資本主義的な人生觀からでは到底駄目である。新たな大きな理想を以て、その理想の上に新しい産業の建設に努力して行く、それが大切なことである。教育勅語の中に「皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ」と仰せられ



てゐるが、私の新産業機構建設の理想は、この御勅語に従ふことである。産業はすべからず目前の利をのみ追ふことをやめ、國家百年の理想の上に、徳を基として建設されねばならぬと信ずるのであります。

この新らしい産業機構の建設の仕事は、時局の進行と共に、工業的労働が國家的な任務として、企業家は勿論の事、作業場の労働者諸君に認識されてくれば来る程、一つの重大な問題として取扱はれることになると思ふのであります。この點に關して用意を怠ると、大正七、八年に経験しました處の、産業不安以上の、重大なる産業不安が或は發生することなきを誰か保證し得るでありませうか。我々は極めて正しき認識の下に、着々周到なる用意をしなければならぬと思ふのであります。我々は凡ゆる科學の方途を盡し、この時局に出来るだけ正確に、且つ正しく我々の歩むべき道に就ての科學的實證を掴む事に依つて、その實證の上に諸君と共に新しい産業構築の建設に協力して行きたいと熱望して居る次第であります。

之を以て私の話を終ります。

昭和十三年三月二十八日印刷  
昭和十三年三月三十日發行

## 文部省社會教育局

東京市神田區西神田一丁目九番地  
印刷人 大 島 秀 一

東京市神田區西神田一丁目九番地  
印刷所 太陽印刷株式會社



275  
60



275  
6  
60



終